

衣食住遊

第一〇回

夕涼みに 元禄人の遊び心 を見つけた

越後屋に衣裂く音や衣替え

其角

元禄の俳人、宝井其角の代表作のひとつを挙げてみた。句意はもうお判りのように、夏の衣替えのため、越後屋（後の三越）にお客が押し掛け店頭では次々に布を裂いて売る音が響くよ、といったもの。耳から伝わる感覚が、鮮やかに江戸の町の初夏を伝える。ちなみに江戸の平和は300年ちかく続き、中でもこの句の元禄時代は、商業の興隆とともに俳諧や浮世絵など庶民文化が花を咲かせ、日本のルネサンスと言ってもいい時代だ。富裕な町民たちも経済力をもとに、自負を大いに強めた。

夕涼みよくぞ男に生まれける

其角

其角にはこんな有名な句もある。浴衣をもち肌脱ぎにした伊達な男の姿が目につかぶ。其角の師匠は芭蕉だが、師が枯淡な田園詩人とするなら、弟子は才気煥発のシテイ・ボーイ。酒と遊びが大好きで、性格は磊落。句も都会人だけにモダンで切れ味鋭く、大衆の心をつかむ点では、現代の広告コピーに通ずる。筆者が敬愛する俳人である。

ところで、この句の詠まれた場所はどこなのか。おそらくは大川（隅田川）の「涼み船」ではないか。大坂と同じく江戸は舟運都市。屋形船に乗り込み大川に出ると涼風が、ほろ酔い気分の顔や体をなでるように吹きぬける。見れば月も川向うから昇ってくるではないか！ そんな颯々たる夏の納涼図と見る

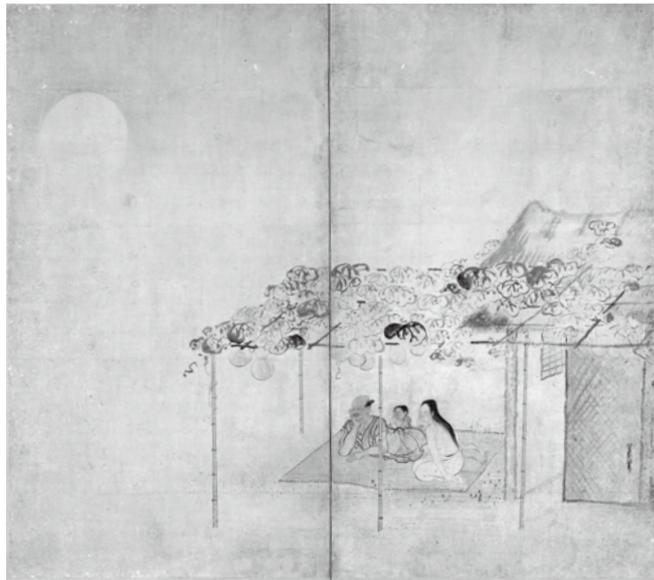


Image: TNM Image Archives

納涼図屏風

所蔵 東京国立博物館

ころが面白いことに片方で、かくも脱力したラテン的なまでに享乐的な絵を自分で描いている！ 守景は富貴や権勢など望まず、自然や家族の親愛に包まれて暮らす庶民の自足した姿に、万感の共感を寄せているのだ。この時代に、農民の平凡な日常生活を画題としたのもまた珍しい。ルネサンスのヒューマニズム（人間中心主義）の思想が日本でも、元禄の遊び心の土壌のなかに芽を吹いたと筆者は見立てる。

文 岩佐 倫太郎

Iwasa Rintaro

いわさりんたろう／美術評論家。美術ソムリエ。京都大学文学部卒業後、広告代理店の空間プロデューサーとして「キッズフラザ大阪」「なみはや国体」などを手掛ける。著書に「東京の名画散歩——絵の見方美術館の巡り方（舵社）。美術に関する執筆・講演活動のほかメルマガ「岩佐倫太郎ニュースレター」(<http://iwasarintaro.tenablog.com/>)に再録を発行。

のが妥当だろう。そこから筆者はさらに妄想を働かせて、吉原に向かう舟、「猪牙」の船上ではないかとも考えてみたが深読みに過ぎるだろうか。

それはともかく、江戸人の納涼といえば、取り上げないわけにいかない絵がある。「納涼図屏風」（国宝）。作者は、狩野探幽の高弟の久隅守景。生没年は不詳ながら、絵は元禄かその直前の作と推定される。まずは絵をご覧いただきたいのだが、このリラックスぶりはどうだろう。ひょうたんを這わせたつる棚の下、農家だろうか、一家三人の睦まじい夕涼み。今日は早く仕事を終えたのかな。それともお盆だったか。若い女房は行水の洗い髪のまま、半裸の姿。背なかの子供も片肌脱いで実に可愛い。男はもうすでに夕食に一献頂いたのか、赤ら顔にも見える。何憚ることのない庶民の夕べのくつろぎ。頬杖などついて、月の光の下、「ああ、我が家は極楽だなあ！」と悦に入ってるのか。

狩野家は幕府の発注で、虎や鷹などの襖絵を直で権威主義的なスタイルで集団制作したが、そんな折、守景は探幽が頼る一番の片腕だった。と